

音楽発表会…「飽きない」 その④ 2020. 3. 17

○全体を通して

私は妙なことを感じていた。「聞いていて、飽きないな」である。

昨年11月、孫の小学校（東京）の学習発表会を参観した。教室で発表、講堂での発表、いろいろあった。講堂をのぞいてみた。音楽だけでなく、演劇などバラエティに富んでいる。だが、2プログラムを参観しただけで飽き、退出してしました。

私は飽きっぽいのかなあ、根気がないなあと反省したものである…。

これでいけば、わが校の音楽発表会も「飽きる」はず。だが、飽きない。それはなぜか考えた。

自分の学校だからとか、知っている子どもだからとか…その理由は思いつく。だけど、それだけではないなあと思った。

合唱や合奏を聞きながら、私はこんなことが頭に浮かんできた。まずは、心配が出てくる。

「上手にできるといいなあ」「大丈夫かなあ」…言わば、親心であろうか。なんだか、自分もステージにいるような感じ。

そして、それはもっと広がる。この子にはこんなことがあったなあ、このクラスはこんな感じだったなあ。この学年とはこんな付き合いがあったなあ…そういう日常との連続性の中で、音楽発表を見ている、聞いている自分がある。

そんな子どもたちが、そんなクラスが、そんな学年が、こんな立派になった、成長したなあ、すごい頑張りだなあ…音楽発表会が「点」でなく、「線」として私の中に連続性をもった広がりとして見えてくる。それが「飽きない理由」

プロのコンサートは非日常の世界への誘いなのであろう。

小学校の「みんなが参加する」（選手とか、選ばれた一部でないという意味）発表会は、日常の連続性の中にその意義をより発揮する。

ともあれ、関係者（みんなであるが）、お疲れ様でした。

アキマセンデシタ・・・この言葉、音楽音痴の私からすると、最高の誉め言葉かも。

音楽発表会「飽きない」 終わり



☆From the Andromeda☆